

## 旅の地理学 カルヴィーノのアメリカ

和田 忠彦

「なぜアメリカ人は歴史の感覚を持ち合わせないのか？」——「アメリカ日記 1960」と題された不揃いな断章 24 篇は、この問いからはじまっている。

『アメリカの楽道家』*Un'ottimista in America* とよばれる小説の結末に置かれるはずだった断章は、だが結局のところ、雑誌『新評論』*Nuovi Argomenti* (1961 年 11 月/1962 年 2 月合併号) に「日記」の体裁で掲載されただけで終わった。これらの断章が果たしてどんな小説世界に棲まうはずだったのかを知る手だては残されていない。

判っているのは、哀しいほど滑稽にゆたかなアメリカにあこがれるローマの男をアルベルト・ソルディが演じた『ローマのアメリカ人』*Un americano a Roma* (1954 年) を連想させるタイトルと、当時イタリアでもすでに大量に出回りつつあった「ルポルタージュとしての旅行記」にたいする反撥と作家としての自負が完成を先送りにさせたという、1963 年 4 月 23 日付と 1985 年 1 月 24 日付、2 通の友人に宛てた手紙に記された刊行の断念へといたる経緯だけだ(易きに流れるを潔しとしない気質は、作家の死後に判明した数多の未刊作品の存在によっても際だって目を惹く)。

けれど、ここでわたしたちの関心を惹くのは、1959 年 11 月、フォード財団の招聘によって実現した、半年におよぶはじめてのアメリカ滞在の経験を、帰国後作家が小説というかたちでは果たせなかったにせよ、さまざまな雑誌に、先の書簡での記述とは裏腹に、相当量の「ルポルタージュとしての旅行記」を綴っている点にある。

1960 年から 62 年にかけて、「アメリカからの絵葉書」(『ABC』誌連載)、「アメリカ・ノート」(『文学ヨーロッパ』誌連載)、「モーターの古典作家たち」(『イタリアン・イラストレーション』誌連載)、「しんがり日記」(『現在時』誌連載)、そして冒頭に挙げた「アメリカ日記 1960」と、ときに並行して作家のアメリカ旅行記が発表された。さらに、歿後刊行された『パリの隠者』(1994 年)には、「アメリカ日記 1959—1960」と「ニューヨークがわたしの町」の 2 篇が収められ、作家のアメリカ旅行にまたあらたな顔を加えることとなった。

さて、件のアメリカ滞在には、わたしたちの作家のほか、ヨーロッパから詩人トムリンソン (Alfred Charles Tomlinson)、前年創設されたメディシス賞を獲った小説家オリエ

(Claude Ollier)、ゴイティソーロ嫌いが昂じてフランスに亡命したスペイン人劇作家・映画監督アラバル (Fernando Arrabal)、ベルギー・フラマンの若手人気小説家・劇作家クラウス (Hugo Claus) といった顔ぶれが同行した (招待作家のなかには、ギュンター・グラスも名を連ねていたが、出発直前の検査で肺結核の疑い有りとな診断され不参加を余儀なくされた)。

59年のことだから、一行5名は大西洋航路を退屈と付き合いながらニューヨークへと向かった。『パリの隠者』所収の「日記」と称する11月3日付友人宛の手紙には、その退屈が「歴史にたいする困惑。すべてが動いているのに、自分だけが遠く切り離されている感覚」と規定されている。洋上にあって、どうみても孤立ではなく疎外でしかない状況のもどかしさ——それが退屈の正体だと作家は分析する。そしてたぶん、こうした退屈は詩人レオパルディが故郷レカナーティで日々向き合いつつ詩へと繰り込んでいった心境に重なるのだろうと、みずからを慰めるようにつぶやく(「わが旅の友(若き創作家たち)」)。

ともあれ退屈をどうにか凌いでニューヨークにたどり着いた一行は、5th アヴェニューのホテルを逗留先に、半年におよぶ滞在生活をはじめめるのだが、その間わたしたちの作家がトリノの友人たちに書き送った「日記」には、ちいさな見出しとともに、出遭った出来事や人びとの寸描がその都度、じつに小まめにつづられている。町の第一印象がドイツの町に似ているとか、はじめて手にした「ニューヨーク・タイムス・ブックレビュー」がイタリアの日曜版と変わらない薄さでがっかりしたとか、パーティで会ったアレン・ギンズバーグの出で立ちからして、ビートニクスの連中はみんなきつと髭もじゃで汚らしいにちがないとか——あらたな体験が一見いかにもナイーヴにつづられている。

けれどこれらの寸描に添えられた寸評からは、わたしたちの作家が他者をみるときの、アイデンティティの複数性に寄せる信頼に根ざした他者の視線に寄り添おうとする姿勢が、36歳の時点でもうかがえることがわかる。

それはたとえば、最晩年の作品集『パロマー』(1985年)全体を貫く相対主義の視線と同じものだ。生きることすべてが絶えず揺れ動く心とまなざしの「旅」であるような、不連続の移動のなかで時空に翻弄される出来事の連続であるとき、「旅」はけっして非日常を前提としない。だからパロマー氏は、パリの自宅近所のチーズ屋に出かけても、それが「チーズの博物館」(『パロマー』II.2.2)への小旅行になる。足を踏み入れてしばらくすると、その店が「独学者のための百科事典」みたいに思えてくる。そしてついには、その店が「一卷の辞書」であり、「言語は総体としてはチーズの体系なのだ」と発見する。「ひとつの文明がその歴史と地理全体を通じて蓄積してきた知恵の遺産がこの店に保管されている」とパロマー氏が予感するのは、「お国言葉の形容詞を使った」店の看板をみた瞬間だが、それはたぶん、こうしてみずからの視線がとらえた事物のむこうに、その事物にかたちをあたえた時間(=歴史)と空間(=地理)をみることの反復と差異のなかに「生きるという

旅」があると作家が考えているからだ。

類推の無限連鎖のような抽象性に絡め取られたかにみえるパロマー氏の思考（と視線）は、だが、もっぱら日常の枠の中で展開することによって、具体性と現実性を保証されている。

こうした作家最晩年の思考が、すでにその四半世紀前のアメリカ滞在でも作動しているらしい、というのが筆者の見立てだ。

冒頭に引いた作家の発した問いに立ち返ってみよう——「なぜアメリカ人は歴史の感覚を持ち合わせないのか？」

作家はこの問いをめぐる想定問答を披露しながら、徐々にみずからの意図を明かしていく。アメリカが中世も古代ギリシャも古代ローマ帝国も持たないことが歴史感覚の欠如をもたらすのではないと述べて、月並みな答えを一蹴したのち、歴史の感覚とは、過去以上に未来について思考する方法のひとつであると指摘する。そして「この国が歴史ではなく、地理を選んだ人びとの国であるという事実」をあらためてふり返ってみせる。

3世紀以上にわたって、アメリカは、(集団であれ個人であれ)人びとにとって、出身国がかかえるさまざまな歴史的問題と向き合うための地理的解決であった。「巡礼」の父祖である清教徒たちは、17世紀、18世紀を通じて、イギリスの宗教的抗争に際して地理的解決を選択してきた。宗教的寛容や教義の勝利が望めなくなれば、場所を変えるほかなかったというわけだ。19世紀には、イタリアやドイツ、ポーランド、ロシア、アイルランドの貧しい人びとが、飢えを前にして、自国では何ひとつ歴史的発展の方策が見つからないと判って、地理的解決を選択した。大西洋を渡ったのだ。ロシアとハプスブルク両帝国のユダヤ人たちは、ポグロムに脅え、同じ道を選んだ。[…]

アメリカの歴史自体も大半が国内における地理的解決の探究であった。「開拓者(パイオニア)」とよばれた人びとがヒーローであったのは、かれらが「境界」を移動させ、今いる土地に留まっていたら手に入れられなかったもっとゆたかな暮らしを、別の土地にもとめたからだ。アメリカの内なるアメリカをもとめたからだ。

(「アメリカ日記1960」)

そして「内なるアメリカ」という地理的解決も発展の手立てでなくなったとき、アメリカが選んだのが、「アメリカを護る」ため国外に戦争に行くことだったと作家は言う。アメリカにおいて地理的解決が「アメリカへの旅」であるかぎり、世界のどこかに「帰る」という発想は成立しない、というのがこの時点での作家の見方だった。

ここで留意すべきは、36歳の作家がはじめて体験したアメリカの背後を、いつも覆っていた影のような存在があったことだ。ひとつはソビエト連邦、そしてもうひとつはイタ

リア共産党である。言うまでもなく、両者はこのとき作家のなかで不可分の関係にあった。

1956年のソビエト軍によるハンガリー侵攻を境に、作家とイタリア共産党の関係に亀裂が走ったことはよく知られている。同じ56年、侵攻直後に書きはじめた小説が『木のぼり男爵』となって翌57年、雑誌に発表されたことで、党との関係はさらに緊張を増すことになった。そして同年8月7日、党機関紙『ウニタ』に、作家の離党が公表される。

作家として政治とどう関わっていくか——その答えは、『木のぼり男爵』、次いで刊行した『不在の騎士』（1959年）の2作でしめし得たと作家は考えていたはずだ。

みずからの態度としては、「距離」を置き「みつめる」こと。そして離党した党とソビエトにたいしては、「空っぽの虚像」であるという現実を突きつけること。

とはいえ、作家自身はいまだ社会主義の理想を捨て去ったわけではなく、あらたな社会変革の方途を懸命に模索しつづけていた。フォード財団による招聘は、まさにこの時期に届いたのである。

それゆえ、これまで言及した作家のアメリカ滞在の記録には、否応なく、ソビエト連邦共和国の影が張りついている。アメリカのなかに、ソビエトによって破綻に追い込まれたかにみえる社会主義の理想に代わる理想社会実現の可能性をもとめようとして、両者の比較を試みる記述が頻出する。もちろん両者を単純に対極に配しているわけではない。あくまで、「歴史主義者であるヨーロッパの旅人」として、アメリカをソビエトの有効な比較項に見立て観察するという態度である。

しかも作家には、アメリカ滞先に先立つこと8年、50日間ではあったが、ソビエトを旅行した経験がある。党の機関紙『ウニタ』の特派員として、モスクワとサンクト・ペテルブルクを訪れた作家は、「トリノ共産党の一員として、往々にして知識人には不得手な労働者組織と直に継続的友好関係をむすぶことができる」と自負するくらい、模範的な党員記者として精力的に取材をつづけた。

もちろんこの時点で56年秋を境に起きる出来事を作家が知る由はないとしても、この取材旅行から生まれた大量のルポルタージュが党機関紙の各地の紙面を飾り、少なからぬ反響を呼んだという事実は、59年からの半年アメリカを旅する作家にとって、きわめて有効な批判的比較のための糧であったと同時に、にわかには拭いがたい苦い体験として軛のようにのしかかっていたにちがいない。

先にみた「アメリカ日記 1960」の一節にある「内なるアメリカ」をめぐる歴史と地理の考察は、こうした二重写しのソビエトとヨーロッパが投影された図像の描写なのだと考えてみればよいのかもしれない。

作家はその後、1976年、83年と、アメリカを再訪しているが、いずれも大学を中心に回る講演旅行であり、最初の旅行とは明らかに趣が異なる。そして85年に予定されていた4度目のアメリカ訪問は、作家の急逝によって実現しなかった。

だが、この果たせなかったアメリカ旅行の目的であったハーバード大学での講義の準備を進めるなかで、ごく最初にその全体を思い描きながら作家がつづった草稿が死後発見されている。「始まりと終わり」と題された草稿（邦訳『アメリカ講義——新たな千年紀のための6つのメモ』所収）には、59年から四半世紀を経て、作家のなかに、またふたたびアメリカの人びとにむけてつたえたいと願う課題が繰り返し記されている。

わたしに課せられた問題を明言するなら、それは「世界の前でひとつの物語を語ることは可能か？」というものです。1個の物語が他の物語を含んでおり、他の物語によって貫かれ、〈条件づけられ〉ているとすれば、どうやってその物語を取り出せるというのでしょうか。その他の物語というのを拡充していけば、やがては全宇宙に到達するのでしょうか。それに世界がひとつの物語に収まらないのなら、どうやってこの不可能な物語から、なにか完成した意味をもつような別の物語を切り離すことができるのでしょうか。

「世界の前でひとつの物語を語ることは可能か？」——おそらくこの問いをめぐって、作家は40年余にわたって言葉を紡いできたのだろう。そして、この問いが、じつはこの小文の冒頭に引いた36歳の作家が投げかけた問いにたいする答案でもあることを、作家は識っていたにちがいない。